

# 東方project 始祖神と 邪神の力

デリシャ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

大二病の大学生が、古本屋で買った古文書を読み、幻想入りさせられる。  
そんな、訳分からない世界で、生すきていく大学生のお話

# 目次

プロローグ

1

神様達と、始祖と邪

9



# プロローグ

世界には、始祖神と呼ばれる物が、存在した。

彼は、純粋無垢な心を持ち、強大な力を持っていた。

ただし、彼は自らの力の大きさに気づかなかつた。

何故なら、彼は孤独だったから、

孤独故に力を比べる相手も、存在しない。

彼は、自分の力を知らなく彼は、創り出してしまった。

自らの、孤独を無くしてくれる。

存在、そう人間を……

---

彼は、いつまでも彼等人間達が動物や自然に、触れ合い自分と、同等の存在に成長していく事を、期待して。

自分が、独りぼっちから解放される事を期待して……

しばらく経ち、彼等は様々な技術や、知識を手に入れる。

そして、彼が更に人間が成長できるような、出来事を彼等の世界に、起こしたのだ。

元々彼等が、持っていた感情、

愛情、悲しみ、幸福。

それに、新たに感情を授けた。

悪意と、善意と呼ばれるものを、彼等はそれを正しく見極める事を、できればいいと、

ただ、それは失敗だった、焦りすぎたのだ、彼等には完全に、悪意と善意を見極める事が、出来なかつたのだ。

彼等は、悪い方向へと、進んでいった。

自分の、都合のいいよにする為同じ、人間を支配し戦い、殺し合うそんな愚かで悲しい、出来事を起こしてしまった。

彼は、悲しんだ。

今までは、人間同士で助け合い、生きてきた人間同士が、殺し合う。

そんな光景を、見た神は、とても切なく大粒の涙を、流しそれから、彼は、自分と同じ力を持ち悪意に満ちた、

存在を、創り出した。

そして、その存在を人間の世界に、送り込んだ。

すると、多くの人は逃げ惑い、捕まった者は悪意に、染まった存在や、欲望のままに生きる存在に、変わっていった。

その存在は、知恵を持ち仲間を増やし、最悪な状況へと、人間を追い込んでいった。

だけれど、人間は皆で助け合い、対抗していた。

力を合わせ、悪意ある存在の元凶である、『邪神』と呼ぶ者に、立ち向かっていく。

その、健気とも言える彼等人間に、彼は誤解をしていたと、反省し『始祖神』である、彼は『邪神』と呼ばれる存在を、封じる為に自分とは、別の神を、作り出し、信仰を得る事で、人間に歯止めを掛け、時には悪意ありき者から、守り通す事を任せ、始祖神は邪神と、共に1つの、黒と白がまざりあった、宝玉になった。

そして、残された新たな神たちは、世界を作り替えた。

最近は、暇である。

何故なら、普通の一般人というか、なんの才能もない、俺には何かいい事が、起きるとも考え難いが、

俺は、子供っぽいのだ、大学に入ればなんか、変わるんじゃないかなーとか思いわざわざ慣れない、勉強をしある程度、偏差値の高い大学に入ったのだが……。

逆に、何も変わらなかつた、なんかとてつもない恋愛が、始まるとか、とんでもない出来事に巻き込まれるとかは、全く起きなかつた。

ただただ、普通の大学生活を送るだけだつた。

まあ、普通の大学生活を送るだけでも、いいのだろうかそんなのは違う！、そう今からでもいい！

命が無くなるうが、とんでもない出来事に、巻き込まれたいと思ひ。

買ってきたのが、この古本屋で買ってきた、古臭いとゆうか古文書的な、なにかしらの本、軽く見てみると何かしらの、アニメとかででる、なんだっけえつと、あの星のマークみたいなの！、

まあいいとして、それが書いてある所に、呪文が書いてあつたのだ。

「いやはや、本気でなんなんだろうか、まあ偽物でも、十円だったし、タダみたいなものだよな！」

そう、いいながら本に書いてある、日本語の文字を読んでいく。

「えつーと、なにになに？」

興味ないページは、ペラペラと読み飛ばしていきながら、自分一人しかいない、アパートの一室に紙の擦れる音が響く

そして、

「ほうほうー、マジか!!、これって異世界的な所に行く方法かもしれない！」

ただ、余り期待していなかったのだが、書いてあった書物には、『この書物を持つ者、この書物に示された術式を、読める其方は、私が作り出した、世界にいる私を、受け容れられる、人物だろう、そしていまから、其方を、その世界に案内しよう。』

「えつ、ちよつと今つて?、今つて今かよ！」

てあれ?、身体が透明になつてる!マジか!

まだ準備が!~~~~~」

透明に、なつていく身体を見て焦る自分には、関係ないようで、どんどん、消えていく、

「まつ、て、まだ!、ポテト、チツ、プス

の青のり〜がー!!」

そして、意識と共に、消失した。

キャラ紹介!

光霧 鞆波 (こうぎり さやは) 20歳 男

少し、大二病まで引きずっている大学生。

一応、やればできる子なのだが、やる気根気本気が、ない!

大二病まで、引きずっていたせいなのか、少し狂気的な願望が、ある。

たまたま、古本屋で買った本が、幻想入りの方法を、書かれた謎の本だった。自分からとゆうより、半強制的に幻想入りした?

ただ、そのおかげで持っていくはずだった、「コイ〇ヤのポテトチップス 青のり味」を持っていけなかった。

容姿 ちよいイケメン

身長 178cm

性格 お布団とポテトチップスが好き。

ロリコンだが、自分では意識して、おらずさらにタチが悪い。  
大二病のせいかなのか？、倫理観より娯楽を大事にする人間。

ネタバレ注意、

能力 有と無を操る程度の能力

あらゆるものの、有と無を操る力。

能力を使うと、左手はその部位だけ、元からなかったようになり、右手は異様な存在感を発する。

例えば、左手で物を触ると、完璧にそこにあつた痕跡も消える。  
右手では、想像した物や、そこにはない物を存在させられる。

全ての力を操る程度の能力

靈力や魔力を吸収し、自分の力に変えたり、相手の中に、流れる力を変えて操ることもできるが。

自分自身に馴染んだ力ではないため、自由に使えない。

## 神様達と、始祖と邪

みなさん、どうも鞆波です！

皆様、今の俺状態どうゆう感じだとおもいます??

予想できましたでしょうか！

そう俺は……

「空の上にあります!! ってか、ふざけんな?!

死んじまいますよ?!、いつもの事じゃないけどこんなの、楽しくないよー!?!」

そんな事を、落ちる中叫ぶ。

しかし、某アニメの悟○の様に空を浮遊する事など、一般人の俺には出来ず、ただただ、重力に伴って落ちるだけだ。

「ヤバイ……地面が近くに……」

いつの間にか、地面は眼前に迫っており、その瞬間

俺は思った

。

『人生オワタ、(´ω´)』とく

『いやはや、呼んだ人間を空に転移させしもうとは、失敗したな…ははっ…』

そう自身の、失敗を乾いた笑いを浮かべながら、言っているのは、すべての世界の『始祖神』である…。

彼は、一度邪神と呼ばれる弟の様な関係の、邪神と戦い封じる為に邪神と共に、黒と白の混ざり合った玉になったのだ。

『つたく、器を見つけたとか言ってたから、期待してたらこのざまかよ…』

そして、その失敗に呆れるように答えるのは、高位の妖怪でも吐き気を覚える様な、妖気をだだ漏れにした者であった。

『だってさー、探し始めてから何万年待ったのに、だーれも読めないんだよ!?!、失敗したってしょうがないじゃないか!』

そう、どれだけ待ったかを力説しながら、言い訳も語った。

『そう思うなら、落ち着け!。別に、人間が死んだ訳じゃないんだ、とりあえず今から一

体化しに行くぞ!!』

『始祖神』を、引き摺りながら人間のいる所に、玉の姿で転移した…。

すぐに、人間がいる場所へと辿り着く。

そして、目の前の空中で、死んだ様に動かない、人間の身体に、玉の状態で人間の身体に自分達と繋ぐ、術式を埋め込んでいく。

『どう?、できた?!大丈夫?!』

『そんな、気になるのなら手伝え!!』

なにも、手伝わない『始祖神』に対して激怒する。

『わかったよ!、えーとつ、こうか!!』

『おい!、なに、やつ?!』

『できた!どう?、どう?』

『始祖神』の、天才的なスペックは頭の隅には、置いてあったものの、苦勞して組み上げていた術式を一瞬で組み上げてしまったのは、なにか釈然としないのだった。

『早く!一体化できなく、なるよ!?!』

『わかったよ…!』

『邪神』は、内心釈然としない中、忠告を素直に受け止めて共に、光の穴の中へと入っていった…。

守屋神社では、二人の神が、神社の巫女である緑髪の少女の入れたお茶を、縁側で悠々と飲んでいた。

「やっぱり、早苗の入れたお茶は美味しいわね〜…」

「だね〜」

「そうですか?、ありがとうございます」

そんな、ゆっくりとした時を最近起きた出来事や、思い出話をしていると、大きな地響きが起きる。

そして、地響きの起きた周辺から力が満ち溢れる様な神力と、大きな吐き気を催す様な、妖力と思われる力がただ漏れになっていた。

「うっ!、なんだい?!この力は!?!」

「よくわかんないけど、変だよ!?!」

「うっ………」

背の高い青髪の神と、外見としては幼女にも見え、頭には特徴的な蛙の様にも見える帽子をかぶった、神の二人はなんとか耐えてはいるが。

巫女の緑色の長髪の少女は、その力にやられ気を失ってしまったていた。

「早苗!?!しつかりしな!!」

「神奈子! 早苗をお願ひするよ!!」

「諏訪子! あんたどこいくんだい!?!」

「とりあえず、何処にいるかだけハッキリさせてくる!!」

そう言うと、空へと飛んでいく。

先程の、地響きの起きたと思われる場所へと、向かっている途中、不思議な光景に出逢った。

放射線状の、形を綺麗に半分にした左側は、様々な動物から、魑魅魍魎まで黒ずみ、灰の様になり始めているのに対して、右側では動物はいつも以上に元気そうに生活しており、魑魅魍魎も穏やかになっているという光景であった。

そして、その異様な雰囲気の場合に近づくと、異様な者がいた。

背中には、輪があり左半分は異常な程黒く、陽炎の様なモノまで現れていた。

さらに、右半分はとても明るく後光でもあるように、煌びやかに光っていた。私は、知らなかった。

その者が、あらゆる者の始祖だとは。